

満州

尊い経験、旅順・大連そして引揚げ

埼玉県 有吉利晃

はじめに

私は、父大本と母初枝との四人兄弟の三番目の子供として、関東州貔子舘管内城子瞳（現在の城子坦）で昭和五（一九三〇）年に出生した。

父は、福岡県遠賀郡芦屋町で祖父が営んでいた古物商の長男として出生し、芦屋高等小学校を卒業し、直ちに直方町の電気会社に就職したと聞いている。ここで学んだ電気技術が、後の渡満後の生活の基盤になったことになる。就職後間もなく徴兵され、下関重砲隊、横須賀射撃学校で兵役に

服したことも、電気技術の取得に役立ったようである。

母は福岡県宗像郡赤間町の庄屋の娘として出生し、高等小学校高等科、補修科を卒業して、家事を手伝いながら手芸などに励んでいたようである。

大正十（一九二一）年六月三日に大本と結婚し、芦屋町の古物商を営みながら大正十一年に長女初子を、昭和二年に長男和利を出産した。

当時は昭和恐慌などと言われ、商売はなかなか上手く運ばなかったようである。

一 父母の渡満と私の出生地城子瞳時代

芦屋町の先輩で小野山悟という方が大正十年に渡満し、本溪湖に在住していた。警察署長をされており、就職の世話も可能ということで、小野山

様を頼って渡満することを、父母は決意した。昭和三年五月十二日、家族四人で下関から朝鮮經由で渡満し、小野山様宅に滞在して就職先を探したと聞いている。

前述したように、父は電気技術を修得していたことから、その関係の就職口を求めていたところ、関東州貔子窩民政署電気課に勤務することが決定し、貔子窩に一家が移住した。その後、貔子窩からさらに汽車で三十分ほど北の城子瞳に変電所が建設されることになり、その業務に当たるため、城子瞳に一家は引越したようだ。

引越して一年後の昭和五年十一月七日に、私は生まれた。姉初子は八歳、兄和利は三歳のときである。城子瞳は大連から出発する南満本線とは金州で別れ、城子瞳行きの金城子線の終点で、満州との国境にある町である。私の記憶では、日本人は百人未満であったと思う。生まれた後、三回の転宅を経て変電所敷地内に住宅が新築されて、やっと落ち着いた生活ができるようになった。

昭和十二年四月、私は貔子窩小学校、城子瞳分教場へ入学した。入学時、分教場は一年生、二年生のみで複式学級で、三年生以上は貔子窩の本校に汽車通学することになっていた。私が入学したときは、一年生は男子五人、女子二人の七人。二年生は男子四人、女子二人の六人の複式学級で、先輩の池端先生が一人で授業をされていた。半分が授業、半分が自習という内容であったが、充実した勉強をしたように思っている。私が三年生になったときに新しい先生が着任されて、三年生、四年生の複式クラスができたため、私は父が旅順に転勤する三年生終了まで、この分教場にお世話になった。

小さな田舎町ゆえ不幸な出来事もあった。昭和十二年、私が生まれた後七年経って弟が出生した。父母とも大喜びで大事に育てていたが、翌年夏、下痢症状を発生した。一軒しかない小さな病院で治療したが、経過が良好でなく急遽大連病院に入院することになった。城子瞳から大連までは、汽

車で約半日掛かる。私と母と一緒に弟を抱いて大連に行き、早速入院したが、容態は回復せず翌日死去した。弟は一年三カ月の短い生涯であった。四人兄弟は三人になり、私は末っ子という形で一生を過ごすことになる。

城子瞳は少数の日本人社会であるため、家族同士の交流が盛んであった。毎月のように家庭を一家で訪問して、親子それぞれの会話を楽しんでいた。また現地中国人とも交流が盛んで、宴席に招かれることも度々あり、その思い出はいまだに脳裏に残っている。

二 旅順時代

昭和十四年に入り、兄が貔子窩小学校の六年生になると、父母は旅順中学校進学を考えていたが、寄宿舎生活を心配しているようである。そこで、母は父の旅順転勤をもくろみ、旅順民政署の関係者にいろいろ相談を始めた。私もその訪問に同伴し旅順の街に触れて、このような都会に住んでみたいと思うようになっていった。交渉は成功し、

父は昭和十五年四月から満州電業旅順事務所勤務することになった。兄は旅順中学校に入学が決まり、自宅からの通学が可能となり、また私も旅順第一小学校四年生に転校することになった。

最初の住居はなかなか見つからず、旅順市の東地区にあった古家にやっと落ち着いた。

旅順第一小学校は各学年四クラスで、約百六十人から百八十人在籍し、学校全体で千人から千百人の大規模校であり、小規模な分教場から転校してきた私にとっては、本校での学習にはいささか辟易した。学校行事としては、日露戦争の戦跡巡り、遠足が学期ごとであり、東鶏冠山、白銀山、水師宮会見所などを訪ねた。また旅順は海にも恵まれており、黄金台での海水浴なども楽しい思い出である。

昭和十六年に入ると日支事変もだんだんと深まり、遂に十二月、大東亜戦争が勃発した。生徒全員が講堂に集められ、雪の降る寒い日に校長先生からいろいろと訓示があった。その後防空壕訓練、

灯火管制などが実施されたが、何か遠い地の出来事のようにあまり実感はなかった。

昭和十七年になると、姉が第一小学校に赴任してきた。姉は旅順高等女学校を経て旅順女子高等師範学校に進み、昭和十六年に卒業後大連の南山麓小学校に奉職していたが、自宅が旅順にあることを考慮して転校させて頂いたと聞いている。姉と六年生であった私が同じ学校に通うことになり、何かと目立つ存在になり身を慎むことになったのは皮肉である。

小学校四年から六年の間で、私は身体があまり丈夫でなく、二回の入院生活を送った。一つは、転校後間もなく原因不明の高熱に冒され、旅順医院に約十日間入院した。病名は詳しくは知らないが、転地による環境の変化であったと思う。もう一つは、五年生の冬、にわか呼吸困難になり近所の病院に急遽入院したところ、湿性肋膜炎と診断された。十二月末から正月にかけて、手術を含めて約三週間の入院生活を送った。当時の医学でよ

く治療できたものだと感じている。このため、六年生のときに実施された、満州奉天（瀋陽）新京（長春）への修学旅行に参加できなかったのは残念であった。

だんだんと戦時色が濃くなるころ、慰問袋送付の呼び掛けも多くなってきた。我が家も数通提出したが、中の一つが近くの旅順陸軍病院勤務の佐藤上等兵に当たったのは、奇縁であった。旬日後、佐藤上等兵は我が家にお礼に来られ、終日懇談をした。その後、毎日のように来られるので、よほど私と気が合うのかなと思っていたが、これは全くの錯覚であった。私の姉が昭和十九年に結婚して大連に移住してからは、全然音沙汰が無くなってしまった。子供には大人の気持ちは察せられなかったのは、当然のことかもしれない。

四年生から六年生の第一小学校生活も終わりに近づき、いよいよ旅順中学校への進学を考えるころになった。当時は筆記試験はなく、内申書で入学が許可され、昭和十八年四月に旅順中学校への

入学となった。

三 旅順時代（旅順中学一年～三年半ば）

旅順中学は日露戦争終焉直後、関東都督府中学校として開校された伝統ある学校だった。私の入学以前は、年中行事として陸上大運動会、修学旅行など楽しい行事も催されていたが、戦時下に入りそれらは全部中止されて、もっぱら勉学以外は教練、通信訓練などに明け暮れる毎日であった。

入学間もなく関東神宮の建設が始まり、定期的に建設の補助に行くことになった。モッコに土砂を入れ、担ぎ慣れない労働をしたことも健全な身体を作ることには役立ったかもしれない。

二年生に進級するときに、四クラス二百人のクラス再編成が行われた。軍関係希望者五十人を一組、その他百五十人を二～四組とに分けられた。

私は陸軍幼年学校を受験する予定だったので、一組に入れてもらった。学習内容は一～四組とも変わりはないが、競争意欲を盛り上げるものだったのである。昭和十九年十月に大連で幼年学校試

験が実施され、旅中からも多数受検した。筆記、体格検査に合格した内定者は、翌年一月の憲兵による家庭訪問調査が行われることになっていた。

私を含めて五人にその調査が行われ、入学の心の準備をしていたが、中の良かったY君と私には正式の合格通知はこなかった。理由は知る術もない。結局、旅中から三人が広島幼年学校に入学した。

三年生になると、勤学動員に向くことになった。動員に赴く前に三つのグループに分けられた。第一は身体頑健なグループで、大連市外の進和鉄鋼へ、第二は身体中級程度のグループで、甘井子の満州化学工業へ、第三は病弱グループで、旅中に残留する組である。私は身体頑健とも思えなかったが第一のグループに属し、「進和」へ行くことになった。「進和」は立派な機械工場で、あらゆる設備を備えていたが、私はネジ切り作業の補助を担当した。妙齢のクレーンと一緒で楽しく作業をさせてもらったが、工具を破損したり機械を停止させたりして、あまり生産向上には役立た

なかったように思っている。

勤学動員期間中に、二つの免許を取ることができた。一つは銃剣道初段（当時は五級と称した）である。銃剣道は中学入学以来教練の正課で訓練していたが、早めに実技試験を受けるように指示があり、グループ試験で全員合格となったものがある。もう一つは三級滑空士（グライダーのプライマリー）である。選抜されて六月から約一カ月間旅順に戻り、二十人がグループで毎日血の滲むような訓練を受けた。グライダーを二十回引っ張って、一回しか搭乗できない訓練を百三十四回繰り返して、手に入れた免許である。

七月にまた「進和」に戻り、工場生活、寮生活を続けているうち、八月の第二週に旅順の自宅に一時帰省した夕方、翌十五日正午に大事な放送があるので、全国民ラジオを聞くようにと繰り返し予告があり、十五日正午家族全員で、よく意味の分からぬ玉音放送を聞いた。中学三年の私には内容はよく理解できなかったが、また頑張って勤勞

動員をやれということだろうと、翌十六日早朝も旅順駅の集合場所に重い荷物を持って行ったが、何となく集合が悪く、皆がうろろしていた。そのうち、先生が皆を集めてもう動員に行かなくても良いと言われ、皆、虚脱感を抱いて自宅に戻った。これから、いわゆる戦後の生活が始まることになる。

四 八月十六日以後大連疎開まで

ソ連軍は八月参戦後南下を進め、八月十九日に旅順へ軍用列車が進入して来た。戦車が降ろされ、轟々とキャタピラの音を立てながら市街に走り込んで来た。私たちはただ呆然とするだけだった。かなりどう猛な部隊で略奪や暴行が行われ、我々は家に閉じこもっていた。私の友人の女学生数人は頭を丸坊主にして男装し、暴行を逃れたようだ。九月に入り新市街住民の旧市街への集結が命じられ、旧市街それぞれの家に新市街住人の一戸当りて受け入れが義務づけられ、私の家にも懇意にしていた旅順中学の先生一家を受け入れた。それぞれ

れの家族が八畳間に四人ずつ生活するもので、窮屈ではあったが別に苦勞とは思わなかった。

小学校は新市街から移住して来た附属小学校生を受け入れて、九月末まで授業が続けられたが、私たち中学生は無聊を囲って生活していた。

大連を含む旧関東州はソ連軍の支配下に置かれたため、その命令で我々日本人は行動が制限されていたが、十月二日に旅順居留民の大連移住が命じられた。鉄道関係者、特殊技術者、医療関係者などを除き、十月中旬まで居留民の移動が実施された。私の家は父が電気技術屋であったため残留となり、母と兄の三人で移住した。荷台付きの馬車にわずかな荷物を乗せ、荷台には家族三人が座ったまま、一日がかりで大連に移動した。あまり悲壮な感じがなかったのは、少しずつ先が見えてきたという期待感があったのだろう。

前述したように、姉は第一小学校奉職途中の昭和十九年に、大連市伊勢町の畳間屋の若主人と結婚していたので、その浜本宅に同居することにな

った。父は電気技術者として残留したが、残留日本人は中国人技術者たちと同居することになり、生活様式の違いなどで悩みを抱え、かなり無理な生活となった。これが身体を損ね、後述する昭和二十二年引揚げ直後の早逝の原因になったのは、残念なことである。

五 大連移住後引揚げまで

姉が嫁いだ浜本商会は、全滿への畳卸業務とラジオ販売修理業を兼業し、幅広い経営をしていた。従って倉庫を含む家は広く、私たち一家を受け入れる部屋も手狭ながら与えられた。家業を継ぐべき姉の夫は体は丈夫ではなかったが、いわゆる関東軍の日ソ開戦直前からの「根こそぎ召集」で、昭和二十年六月に召集され、満州奥地に送られた。姉は妊娠中でありながら、半身不随の義母の介護を続けて留守を守っていた。戦後、浜本家の七人兄弟のうち三家族が奉天や大連市内から次々と集まり、五家族の集団生活となった。姉は身重な身体を抱えながら、それぞれの家族の調和に大変苦

労したようだ。私の家の生計は、旅順に残留した父が毎月送ってくれた電気技術者としての給料（ソ連軍の軍票）で、なんとか間に合っていたが、不足分は兄がアルバイトで補充してくれた。三歳上級の兄は、旅順中学四年終了で南満工専機械科に進学し、昭和二十年八月に「根こそぎ召集」で満州奥地に送られたが、幸いにも八月下旬には大連に戻って来た。復学後、学校の取り計らいで十二月に卒業証書をもらうことができた。（これが内地に引揚げ後、役立つことになる）同じ「根こそぎ召集」でも、前述の姉の夫のシベリア送りと比べると、運命のいたずらが各所に見られるのは、やるせないことだった。

父と兄の収入のお陰で、私は十月十九日に大連第一中学校に転入学し勉学を続けることができた。新しい科目として露語が加わった以外、大きな変化はなかった。

十一月に姉の長女が誕生した。設備の整っていない小さな病院のため、私は毎日弁当を運んで長

女成育のお手伝いをした。五家族の集団生活の中、昭和二十年末を迎えることができた。浜本商会はラジオの販売修理を営んでいたのは前述の通りであるが、短波放送が聴取できるラジオを保有していた。十二月三十一日の深夜、NHK放送を雑音を交えた小音ながら聞くことができた。家族全員で将来の不安な気持ちの中で、敗戦の年の去る感慨と内地への引揚げを期待する気持ちの中で、除夜の鐘を聞いた。そのときの印象は、今も忘れることはできない。

昭和二十一年に入っても生活内容に大きな変化はなかったが、徐々に父の収入も減少してきた。生計を助けるため、大連駅前にできている立ち売りの仲間に入ることになった。私は、旅順から持って来た古い毛布などを抱えて行き、初めて立ち売りを経験した。二日目にソ連兵の家族が現れ、価格を手真似で交渉して毛布が一枚売れた喜びは、一生の思い出である。私は、昭和二十一年四月から大連一中四年生に進級し勉学を続行していたが、

二学期に入るときに中等学校をまとめて、男子を日僑中等学校第一校と称することになった。二中の生徒を一中の校舎に受け入れるために、四年生は一挙に八学級三百三十人となり、すし詰め授業が始まった。喧噪に耐えられず、中退する者も多数出たと聞いている。十二月までは学校は続行して、我々は十二月二十日付けの四年終了証明書をもらうことができた。

治安もだんだん悪くなり、盗難、火災なども多発するようになった。私は二回、近所の火災に遭遇した。最初は、我が家の裏にある豊倉庫からの出火である。裏の路地から火の手が上がり、表側の畳に燃え広がってきた。慌てた私はバケツで水を掛けたが、あまり役にも立たなかった。慌て者の私にとっては、これが精いっぱい消火活動であった。幸いにボヤで収まり、ホツとした。もう一回は、昭和二十二年三月の引揚げ直前、隣家で火災が発生した。このときは逃げるのが精いっぱい、二階から飛び降り近所の日本人宅に飛び込

んだ。この時期は引揚げに備えて荷物を整理しており、家財焼失の心配はなく、このときもボヤで終わり難を逃れた。

昭和二十一年秋ごろから、引揚げの話がいろいろとうわさされるようになった。後で聞いた話だが、十月二十三日にソ連軍司令部が大連日本人へ引揚げを通知したとのことである。直ちに引揚げが開始され、第一船が十二月三日に出港した。

引揚げ開始と同時に、中等学校四年生から数人が引揚者リストのロシア語翻訳に駆り出された。私もその一員として、十二月から翌年二月まで毎日夕刻、ソ連軍司令部へ出向いた。ロシア語を三年生後半から習ったとはいえ、不十分ではあったが、引揚げ完遂のため毎日夜遅くまで頑張った。仕事終了時に、ソ連兵から黒パンをもらうのが唯一の救いであった。引揚げは大連市内を六つの地域に分け、沙河口、嶺前、西崗など郊外の地区から優先して始まった。私共の住んでいた中山地区は、一番最後となった。

三月初め、待望の引揚げ命令が届いた。布団袋一個と少々の荷物を持って、ある小学校に集結した。父は、旅順残留生活の中で無聊を慰めるため、少量ではあったが晩酌をしていたようで、そのためか視神経など神経系統を冒されていたので、父と母、姉親子、兄、それと私の六人家族の荷物は、主に兄と私が運搬していた。

集結後、一週間ほどで乗船命令が出た。大連埠頭に行き、三月十一日、「英彦丸」に乗船した。後で調べたところ、乗船員は中山地区千七百人を含めて総員二千九百二十五人であったと聞いている。船底にゴザを敷いての集団生活であった。惨めではあったが、日本内地に帰国できるという期待感もあり、不安は感じなかった。

三月二十日に佐世保港外に上陸し、二日ほど停泊した。甲板に出たときに船内放送で音楽が流れってきたが、「波の瀬に瀬に……」という歌詞が耳に残った。後日調べたところ、これが昭和二十一年に大ヒットした田端義夫の「かえり船」と知っ

た。この歌を聞きながら佐世保市の緑の山々を見た瞬間の感激は、今も忘れられない。

三月二十二日佐世保郊外に上陸し、DDTを掛ければ真っ白になって旧海軍の宿舎に入居した。ここでまた二、三日の逗留を経て、夜行列車に乗り鹿兒島本線折尾駅で下車した。早朝のことゆえ、折尾駅で豚汁を頂き、筑豊線に乗り換え飯塚駅で下車し、父の姉が経営している旅館に恐る恐る一家六人が入った。

ここから、本当につらい引揚げ後の生活が始まる。

六 引揚げ後就職まで

伯母の経営する旅館は、筑豊炭田の中心部の飯塚駅前にあつたため、炭鉱関係の顧客が多く出入りしていた。そのため、三月二十三日から一週間後には退去するようお願いされた。やむなく、今度は母の姉を頼って福岡市に移動することになった。母の姉は福岡市郊外で農業を営んでおり、馬小屋の二階にある一間が空いていた。一家六人、

十畳一間に入ったが、馬のいななきで睡眠不足は悩まされた。父は病弱の体で何とか引揚げて来たものの、衰弱が激しく、福岡市到着後直ちに近所の平尾病院に入院した。食糧も薬も不足している中で、六月十二日に死去した。直接の死因は肺結核で、享年五十歳であった。八月十五日以降引揚げ直前まで旅順に残留し、孤独な生活をしながら一家の生計を支えた無理な生活が病気の原因であったことを思い、親孝行ができなかった悔しさを噛み締めている。

四月からの生計は、佐世保で頂いた千円ではどうにもしようがなかった。兄が南満工専で学んだ電気技術を履歴書に書いて、職業安定所の日雇いに応募した。進駐軍の名島地区のクリーニング電気技術者に採用され、働くことになった。そのクリーニング作業場には、日本発送電株式会社（後の九州電力）名島発電所に勤務していた方の主婦が多く働いており、せっかくの専門学校卒の人も多かったというので、名島発電所の人事課

の方を紹介されたという。人事課の方も兄の人格識見を認めて下さり、名島発電所に本採用となった。姉は前述の通り女子師範学校を卒業し、教員免状を持っていたため、近所の高宮小学校に四月後半から勤めることになった。父の死後、生計の不安があるなか、兄と姉のお陰でなんとか生活ができるようになった。申し訳ないとは思いつながら、私は中学校四年終了のままでは先々不安なので、学業に復することを許してもらった。大連一中と二中が統合して日僑中学校第一校になったとき、私のクラス担任が二中から来られた赤田先生であった。赤田先生も福岡県出身であり、四年二期在学中何かと面倒をもらった。中学復学にあたり、引揚げ後福岡地区におられた赤田先生に相談したところ、赤田先生の出身校である修猷館を紹介していただいた。

四月早々、修猷館の転入試験を受けた結果、赤田先生の口添えもあり四年への編入を受験したにもかかわらず、五年生への編入が認められた。こ

れも後述するが、専門学校の受験資格は中学五年卒業の規定があり、学費に自信のない私にとつて有り難い成り行きであった。

こうして家族五人の新生活がスタートし、盛夏を過ぎたころ、思いがけない朗報が入った。姉の夫、浜本享氏のシベリアからの帰国である。義兄は大学在学時も浜本商会勤務後も合唱に興味を持ち、大連合唱団のメンバーとしても活躍していた。シベリア抑留において、義兄は集団での催しによく独唱したり合唱の指揮をしたりして、目立つ存在だったらしい。シベリア抑留者の内地送還が開始されるときに、最初のメンバーに選んでもらったのは、そのことがきっかけだったと義兄は話していた。

浜本家は広島県尾道の出身であったが、尾道に知り合いもなく、結局は姉と同居するため福岡の私たちに合流することになった。馬小屋の二階はまた手狭で賑やかになった。義兄は、ささやかな食事ではあったがシベリアに比べると毎日がお祭

りのようだと、大変喜んでいた。

その後、義兄一家は職安で職を探し、東京商大の先輩が経営しているある工務店に職を得て、女兒共々一家で箱崎に引っ越して行った。

残った一家、母、兄と私の三人の生活は、相変わらず主食不足が続いていた、伯母の家は農家とはいえ主食は豊富ではなく、そう無理が言える立場ではなかった。兄は勤めていたので、休日の主食の買い出しは私の役目であった。買い出しの場所は二カ所あり、一つは筑後の田舎、もう一つは糸島であった。始発の列車に乗って現地に向き、山の中の農家を一軒ずつ交渉して回るのは、交渉要領も含め並大抵ではなかった。薩摩芋を少量でも入手して満員列車に乗り込み、夜遅く帰宅するときはささやかな満足感を得たものだ。

こういう生活を続けている中、翌昭和二十三年中学卒業を迎える時期が近づいてきた。家計は苦しかったが、中学卒業のまま社会に出るのは心許ないと母も兄も薦めてくれて、上級学校を受験す

ることにした。家から通学できる範囲ということ
で、久留米工業専門学校機械科を目標に決めた。
担任の先生の強い勧めもあった。

四月、修猷館五年生に入学して間もなく、はし
かに罷り一カ月休学したこと、夏休みは終始進駐
軍の日雇いアルバイトをしたことなどで、受験勉
強はほとんどしていなかったが、昭和二十三年二
月に受験し、なんとか合格することができた。

四月に入学した機械科三十人は陸軍幼年学校、
海軍兵学校、予科錬など軍関係学校、朝鮮、満州
からの引揚者も多く、個性あふれる集団だった。
通学は西鉄電車と国鉄の二つのルートがあったが、
費用の安い国鉄を選び、博多駅から久留米駅まで
約二時間の通学時間であった。

昭和二十四年に入り、兄が名島発電所の社宅入
居が認められ転居したが、今度は私が国鉄香椎駅
からの乗車となり、また三十分通学時間が延長さ
れたが、このことは戦後の日本人社会ではそれほ
ど珍しいことではなかっただろう。専門学校一年

生終了時、戦後の学制改革が実施され、旧制高校、
専門学校の新制大学移行が決まった。久留米工業
専門学校は、福岡県北部に所在の明治専門学校と
の関係で九州大学分校への統合となり、学校は廃
校となった。新制大学を受験する方法もあったが、
学費が工面できる余裕もないことから、このまま
専門学校に残ることにした。だから、我々が旧制
最後の専門学校卒業となった。卒業までの間の二
つの出来事を紹介しておこう。

一つは大病での入院である。二年生の秋、伯母
の家に芋掘りに二日間出向いたときのことである。
その年は芋が豊作で、家族総出で収穫した。初日
の夕食で、芋を主体にした「ぜんざい」をご馳走
になった。夕食後腹痛を起したが、体を暖めて
休んでいれば治ると思っただけで寝たが、痛みは治
まらず、福岡市内の佐田病院に緊急入院した。急
性虫垂炎であったのに、温めたため盲腸が破裂し
て腹膜炎を併発していたので、一カ月の長期入院
となった。膿を出すため開腹手術の傷は縫合でき

ず、自然治癒を待ったため、今でも傷口はそのまま残っている。

もう一つは木馬の経験である。前述したように、義兄はある工務店に就職したが、その工務店は福岡と飯塚との中間に位置する八木山に森林を保有していた。義兄は、昭和二十四年からその森林の木材伐採作業の現場管理者ということで、一家で八木山に駐在していた。私は専門学校二年の夏休み一カ月間を、アルバイトを兼ねて義兄一家に住み込むことにした。山奥で伐採した材木を直径二メートルほどの輪にまとめ、山の斜面に作った木材道を平地まで人力で運ぶ作業が主体的に実施されていた。その木材道を木馬道と称するのだが、実際に経験すると大変危険で、一度だけで中止した。従って、私は下の平地で木材の数量をチェックする軽作業に終始した。義兄のお陰で、多少の日常を頂きながら貴重な経験をさせて頂いた。昭和二十五年に入り、就職の準備が始まる。三年生になると、アルバイトに専念しては卒業設計

などがおろそかになるため、多少勉学に励まざるを得なかった。十月に入ると、就職案内がボツボツ学校に届くようになった。昭和二十五年に朝鮮戦争が起こり、企業活動が活発になったため採用数が増加傾向であった。十月中旬に、株式会社日立製作所の就職案内がきた。機械科から二人が受験し、二回の筆記試験、面接を経て十一月に採用内定の電報が我が家に届いた。最初に受け取った母は嬉し涙が止まらなかったという。私も感動したが、戦後苦難の伴った引揚げ生活を経て、今新しい生活が始まるうとしていることを実感した感激は、一生の思い出である。

七 就職から現在まで

昭和二十六年四月に、株式会社日立製作所に入社した。戦後の引揚げなどの苦難を経ての就職であっただけに、兄と喜びを噛み締めた。最初の赴任地は、北九州の戸畑工場であった。この工場は、満州重工業開発株式会社の総裁をされた鮎川義介氏が、明治末期に東洋最初の大型鋳物工場として

設立された、由緒ある工場であった。私は勤務地も生まれ故郷の満州に関わりのある因縁を感じ、心が引き締まる思いがした。社員寮もあったが、少ない給料の中から少しでも母と兄の家計にプラスになるように、名島発電所の社宅からの汽車通勤を選んだ。早朝五時に起床し、香椎駅から二時間の乗車時間を経て戸畑駅に到着し、八時の始業時間に間に合わせるのはかなりの重労働であった。残業を少しでも行くと、自宅着は夜九時ころになる。こういう生活を昭和二十六年四月から約三年間続けた後、兄の結婚を機に工場の社員寮に入ることにした。

入社から六年が経ち、少し会社生活に慣れてきたころ、母と兄から名島発電所の上司の親戚である方との縁談があり、昭和三十二年五月に結婚した。兄は子供が二人になり、社宅も手狭になったので、今までの恩返しもあり、結婚後母を私の家庭に迎え入れ、新生活が始まった。爾来、母の死まで二十数年間の同居生活を許してくれた妻に、

心から感謝している。戸畑地区で五回の転居、昭和五十一年に東京本社転勤後二回の転居を繰り返す中で、長女、長男、次男に恵まれ無事六十七歳まで勤務できたが、多くの人々への感謝を思うのみであるが、ここからの詳細は省略する。

八 五十九年ぶりの旅順・大連訪問

引揚げ後、旅大地区中学校の同窓会その他の会などでツアーを編成し、中国訪問が盛んに実施されている。私もいくつかの会から誘われたが、訪問する気にはなれなかった。理由はいくつかあるが、最も懸念したのは、現地に赴き植民地時代の言動を口にする事である。

二〇〇四年に入り、日露戦争開戦百周年が巷間囁かれるようになり、私も興味があったので関係の本を数冊購入して読んでみると、妻が「あなた一度行ってみたいのでしょう。私も同行してあげる」と有り難い言葉を発してくれた。そこで二〇〇四年九月、大連、旅順、北京の四泊五日の中国旅行に行くことになった。旅順の戦跡は見学で

きたが、私の家があった中心部は道路も建物もすべて改装され、当然のことながら私の家は知るよしもなかった。大連地区は満鉄が建築した建造物、即ち大連大和ホテル、大連病院、満鉄本社などがそのまま残り、有効に活用されているのは大きな喜びであった。立派な遺産として残っていることは、我々にとってわずかな慰めかもしれない。

終戦そして引揚げ

千葉県 神崎 田鶴子

私は、大正十一（一九二二）年に旅順で生まれ、父が官吏であったので、その転勤に従って大連に移り、そこで大連の伏見台小学校に入学し五年生まで在学、再び旅順に戻り旅順第一小学校を経て、昭和九（一九三四）年四月に旅順高等女学校に入学、平穩で落ち着いた生活の日々で何一つ不自由なく過ごしていた。

昭和十三年の春、旅順高女から内地の学校に進学することとなり、東京の青山学院に入った。日本を取り巻く情勢が日一日ときな臭くなってきた昭和十六年春に、三年間の蛍雪の功がなり卒業。両親の膝下に戻り、一時南満州鉄道株式会社の総裁室能率班に務めていたが、昭和十八年の春、望まれて旅順の康德女学校の教師となった。

この康德女学校という学校は、中国人の女子の